



公益財団法人 広島平和文化センター
Hiroshima Peace Culture Foundation

〒730-0811 広島市中区中島町1番2号
TEL (082) 241-5246 (代表) FAX (082) 542-7941 E-mail: p-soumu@pcf.city.hiroshima.jp
平成25年(2013年) 2月/年3回発行 [URL]http://www.pcf.city.hiroshima.jp/hpcf/

—被爆後の広島に寄せられた海外からのさまざまな支援を伝える展示施設—

シュモーターハウスがオープン



曳家移転し、展示施設としてオープンしました

- 所在地：広島市中区江波二本松1丁目2番43号
- 開館時間：午前9時～午後5時
- 休館日：毎週月曜日(8月6日に当たるとき、また祝日の場合は開館)、祝日の翌平日、年末年始(12月29日～1月3日)
- 観覧料：無料
- 交通案内：駐車場はありません。
JR広島駅(南口)から約50分
・市内電車/江波行で終点「江波」下車 徒歩約10分
- 展示解説：1グループ10人以内。所要時間約30分。申込みは希望日の2週間前までに広島平和記念資料館学芸課(☎082-241-4004)へ

広範囲図



周辺案内図



● 皿山 ● 電停「江波」 ● バス停「皿山公園下」

平成二十四年十一月一日、中区江波に広島平和記念資料館の附属展示施設として「シュモーターハウス」が開館しました。「シュモーターハウス」の名前は、米国のフロイド・シュモーター氏に由来します。シュモーター氏は、広島・長崎への

原爆投下に心を痛め、住まいを失った広島の人々のために家を建てて活動を進めました。「シュモーターハウス」は、昭和二十六年(一九五一年)に集会所として建てられて以来、地域活動の拠点として活用されてきました。広島南道路の整備に伴い、集会所としての役割は終えましたが、平成二十四年(二〇一二年)に南東約四十メートル離れた場所から現在の場所に曳家移転して保存され、被爆

後の広島に寄せられた海外からのさまざまな支援を伝える展示施設として生まれかわりました。シュモーター氏の「広島の家」の建設活動のほか、被爆直後の医薬品の提供、肉親を失った子どもたちや被爆者への援助など海外からのさまざまな支援を紹介しています。国を超えて寄せられた善意とそこに込められた思いはどのようなものだったのかを知っていただければと思います。

目次

シュモーターハウスがオープン	1～2	日本平和博物館会議が開催されました	10
被爆体験記「原爆死没者の願いを背負って」(井口健)	3	収蔵資料の紹介「最後の言葉」/市民が描いた原爆の絵「炎の中に閉じ込められて」/被爆体験の継承にご協力を	11
「ピースナイター2012」/ひろしま子ども平和議会/長崎原爆死没者慰霊の会	4	追悼平和祈念館開館10周年特別企画展を開催しました/県外在外被爆者証言ビデオを収録	12
平和への思い育む夏のキャンプ/留学生による平和フォーラム	5	平成24年度ひろしま奨学金奨学生決定書交付式・交流会/留学生会館まつり2012	13
ヒロシマピースフォーラム/「国際平和デー」記念行事/国連軍縮フェロウズの受け入れ	6	被爆体験講話会を開催/「原爆の絵」が完成	14
英語で伝えようヒロシマセミナー/松江市と山口市で原爆展を開催しました/ドイツ博物館職員が資料館を訪問	7	「絵本 はだしのゲン」複製原画資料展/第30回ヒロシマ平和書道展/核をめぐる動向など研究成果を発表	9
		「姉妹・友好都市の日」記念イベント	15
		平成24年度「国際交流・協力の日」	16



写真や模型で「広島の家」を紹介しています

昭和二十年（一九四五年）八月原爆により街は焼き尽くされました。食糧や衣服などの生活物資や住居は不足し、広島市民は苦しい生活を強いられました。また原爆による傷害に苦しみ、家族や友人を失った悲しみから孤独や絶望感を抱くこともありました。

広島の家

スタートした計画

米国シアトルに住み、大学の森林学の講師であったフロイド・シュモア氏は計画を「広島の家」と名付け、募金により住宅建設のための資金を

「広島の家」計画により合計十五棟（二十一戸）の建物が建



作業に使用したハンマー 寄贈/山本勇三氏



皆実町での住宅建設提供/シュモアさんの「ヒロシマの家」を語りつく

活動は続く

「広島の家」の建設は続き、江波皿山のふもとには昭和二十五年（一九五〇年）から昭和二十七年（一九五二年）にかけて毎年、家が建てられ、地域の人々のための集会所（現在のシュモアハウス）も建設されました。

やけどのあとが盛り上がるケロイドは、肉体的な痛みだけでなく、精神的な苦痛ももたらしました。女性た

「渡米治療」の米国協力が募集の窓口となりました。

その後、世界平和と広島での福祉事業を進める「ヒロシマ・ピース・センター」の米国協力が募集の窓口となりました。

その後、世界平和と広島での福祉事業を進める「ヒロシマ・ピース・センター」の米国協力が募集の窓口となりました。

ノーマン・カズンズ氏が主筆を務める「土曜文学評論」への掲載が反響を呼び、全米各地から申し込みがありました。昭和二十五年に最初の養育資金二千ドル（当時七十二万円）が広島市に届きました。

精神養子運動は、海外の市民が肉親を失った広島の子どもたちと私的な養子縁組を結び、養育資金を送付するというものです。

精神養子運動

赤十字国際委員会駐日首席代表のマルセル・ジュノー氏は、広島への援のために連合国最高司令官総司令部（GHQ）と交渉し、多量の医薬品を入手。九月上旬、医薬品とともに自らも広島へ赴き、市内の救護所を視察し、診療にあたりました。

広島に寄せられた

さまざまな支援

設されました。国や人種を超え、多くの人々が協力して進める家づくりにより、戦争で失われたお互いの心を思いやる気持ちが育まれました。

「世代を超えて」開館前日の平成二十四年十月

「世代を超えて」開館前日の平成二十四年十月

「世代を超えて」開館前日の平成二十四年十月

「世代を超えて」開館前日の平成二十四年十月

「世代を超えて」開館前日の平成二十四年十月

「世代を超えて」開館前日の平成二十四年十月



ニューヨークの病院でのケロイド治療 提供/横山愛氏

ちのケロイド治療は国内だけでなく、海外へも広がり、昭和三十年（一九五五年）に渡米治療が実現しました。

「世代を超えて」開館前日の平成二十四年十月

「世代を超えて」開館前日の平成二十四年十月

「世代を超えて」開館前日の平成二十四年十月

「世代を超えて」開館前日の平成二十四年十月

「世代を超えて」開館前日の平成二十四年十月

「世代を超えて」開館前日の平成二十四年十月

三十一日、広島市長や江波連合町内会長をはじめ、米国からもフロイド・シュモア氏の次男のウィルフレッド・P・シュモア氏ら関係者が出席し、開館記念式が行われました。記念式のスピーチの中で、ウィルフレッド・P・シュモア氏は、「父親がもしこの場にいれば、皆さんがシュモアハウスを残してくれたことこそ一番の栄誉だと話したに違いないと思う。なぜなら、このシュモアハウスは世代を超えてこの場所に残っていくからだ」と語りました。



開館記念式でスピーチを行うウィルフレッド・P・シュモア氏

（平和記念資料館 学芸課）



プロフィール
 (いのくち たけし)
 1931年、宮島生まれ。1958年、中央大学法学部卒業。同年、広島市上級行政職試験合格。就職後、文部省より社会教育専門職資格取得。主として平和文化、国際交流・青少年健全育成等コミュニティ分野に取組む。退職後、世界文化遺産厳島神社の総代4期、宮島町議会議員2期当選(廿日市市と合併前)。2001年、宮島ユネスコ協会設立に当たり、発起人チーフとして参画。現在、会長4期。近年、海外23カ国を4ヶ月間訪問し、被爆体験証言活動に取組む。

被爆体験記

原爆死没者の願いを背負って
 ノーモアウォー、ノーモアヒロシマ

本財団被爆体験証言者
 井口 健

非常時の少年時代

昭和二十年八月六日は、朝から真夏の厳しい日差しを受けていました。

私は、旧制山陽中学校の二年生で、十四歳。自宅のある宮島から、天満町にあった軍需工場「東洋製缶」(爆心地から一・五キロメートル)に学徒動員に出ていました。この頃の日本は、中学生も、戦争に必要な物資を作るため、工場に駆り出され、朝から晩まで作業をしていました。

毎日の厳しい実習で疲れ気味で、私が朝、「休みたい」と言うとう、母は「弁当を作ったから、元気を出して頑張るなさい」と私を励ましました。この頃は食糧難でしたから、手作りの弁当は大変貴重で、有り難かったです。私は母の思いに添いたいと思う、すぐにいつものとおり支度をし、七時十分発の船に乗り、対岸の宮島口から広島行の広電(路面電車)に乗りました。己斐駅(現在の西広島駅)で降りて、友達三人と出合い、会社の正門まで一緒に歩きました。

今もトラウマが続く、あの被爆体験

工場に着くと私はトイレに行き、それから八時二十分に点呼がある大集会室へ向かいました。入り口の手前でちょっと空を見上げた瞬間、突然、眼もくらむようなオレンジ色をしたピカッと強烈な閃光を受けました。そのショックで入口から中へ這うようにして入った途端、ドカンという物凄い地

響きで大集会室が崩れ、みんな下敷きになりました。部屋の中は真っ暗闇で空気が臭く、息苦しく、私もそのまま、気絶しました。

やがて、下敷きになった約百五十人の生徒の中から「助けてえ、助けてえ」と友達や母親を呼ぶ悲痛な声が響き渡りました。工場全体に火の手が上がり、大集会室も燃え始め、私はその熱風で目が覚めました。すると、広い大集会室の東側にいた同級生達が西側の隅へ爆風により吹き飛ばされ、机や椅子と一緒に人が何重にも重なり合っている状態でした。

上のほうにいた生徒が机をほねのけ、みんな出ることができましたが、火の海の中、どちらへ逃げるか必死でした。その建物は河岸に立っていたので、ほとんどの生徒が、窓から十メートルくらいの下の河川敷に飛び降りました。私は閃光で目を痛め、下がよく見えなかったのですが、命には代えられないと決断し、飛び降りました。しかし、そこには建物疎開の廃材があり、長い釘が何本も上を向いた状態だったので、地下足袋の上から足に刺さった釘を抜いた時の痛さは泣きたいくらいでした。

河川敷一带を見ると、そこで建物疎開作業をしていた二百から三百人の人々の背中が全部剥がれて腰からぶら下がり、背中からは生き血がいく

筋も流れていました。顔を火傷した人々の顔は、人の顔には見えませんでした。爆風で飛ばされて大けがをした人々、建物の下敷きになっている人々、二重苦、三重苦で気絶している人々、また、「水を下さい、下さい」と右往左往している人々、その状況はこの世の地獄のように悲惨でした。

私は、顔から汗が出ているのかと思っってハンカチで拭いたら、ハンカチが真っ赤な血に染まり、大変な痛みを感じました。頭や顔面に無数のガラスなどの破片が突き刺さっていたのです。なんとしても早く家に帰ろうと、近くに転がっている棒を拾い、足の痛みをこらえながら一歩一歩歩き始めました。

いつも渡る橋は落ちていたので、枕木のあちこちが燃えている中、広電の鉄橋を這いながら渡りました。瓦礫の上一面は、炎があちこちこちらあちこちこちら、どこが道路かよくわからない状況でした。一緒に歩く、血まみれの人々、全身火傷を負った人々、その人たちは、人間というよりは幽霊のようでした。やっと、己斐の映画館が炎上しているのが見える所まで来た時、寂しさを感じた反面、よくここまで歩いたという安堵感がわきました。

すると、急に空が暗くなり、大粒の黒い雨が降り始めました。それは、体に当たるとちょっと痛いような感じの雨でした。途方に暮れていたなら、救援トラックで中年の男性が通りかか

り、臨時の救護所まで乗せていってくれました。救護所は重症患者ばかりで、三百人くらいがむしろの上に寝かされていました。私は顔面と頭部を消毒してもらい、ガラスを何本か抜いて、包帯をもらいました。その後、荒手駅(現在の南草津駅)から出ていた電車に乗り、宮島に着くと、両親を迎えに来ており、助かって帰ってきたことを喜んで、涙ながらに抱き合いました。しかし、自宅に帰ったその夜から発熱、下痢、脱毛などが二週間以上続きました。

(被爆体験記の全文はウェブ版に掲載しています。)

平和についてのメッセージ

一人一人の命を大切にすることこそが平和につながります。そのためには、平素から人の心と心の関わり、ふれあいを大切にすることです。人を思いやる心、人の痛みがわかる心、人を信じる事が出来る心、相手の立場に立って考える心、国際交流(異文化交流)等で、お互い各国の習慣、生活、文化等いろいろ知り、認め合う心。そういうふれ合いから気持ち(心)が通じ合うようになれば、目の前の小さな平和が世界の平和につながっていくと思

います。人間を地獄に落としいれる悲惨な原爆を二度と繰り返さぬよう、これからの世界平和を担う皆さん、私の被爆体験や思いを引き継いでください。



ピースポスターを用いた平和のアピール活動

席の観客には緑色のピースポスターを掲げてもらうことにより、球場全体の緑色の中に赤色の線「ピースライン25」を作り、平和への願いをアピールしました。また、グラウンドでは地元高校生等による「ピースパフォーマンス」を行いました。今回で五回目の開催となり、五回裏のピースポスターを用いたアピール活動には、約三万人の観客が参加しました。

(平和連帯推進課)

ピースナイター 二〇二二の開催

昨年八月五日(日)、生活協同組合ひろしま等との共催により、広島東洋カープ応援の場を活用して核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けたメッセージを発信するイベント「ピースナイター二〇二二」をMAZDA Zoom Zoom スタジアム広島(広島市民球場)で開催しました。

- ① 試合開始前とインニングの間に、大型ビジョンで松井広島市長や湯崎広島県知事等の平和を願うビデオメッセージを放映しました。
- ② 広島で被爆した野球解説者・野球評論家の張本勲氏が始球式を行いました。
- ③ 試合中は、カープの監督、コーチ、選手がユニフォームにピースワッペンを着けてプレーしました。
- ④ 五回裏終了時に、原爆ドームと同じ高さ(地上二十五メートル)の座席の観客に赤色のピースポスターを、その他の座席の観客には緑色のピースポスターを掲げてもらうことにより、球場全体の緑色の中に赤色の線「ピースライン25」を作り、平和への願いをアピールしました。また、グラウンドでは地元高校生等による「ピースパフォーマンス」を行いました。

ひろしま子ども 平和議会を開催

昨年八月六日(月)、広島国際会議場において、「ひろしま子ども平和議会」が広島に集う子どもたちからのメッセージを

ひろしま子ども平和議会は、八月六日の平和記念日に、平和記念式典への参列などのために広島を訪れる子どもたちや広島の子どもたちが、平和への思い



平和のメッセージ発表の様子

意見交換の後、全ての参加団体に「アオギリ賞」「キョウチクトウ賞」「折り鶴賞」の各賞を記念の楯とともに贈呈し、発表を称えました。この記念の楯は、広島市立基町高等学校普通科創造表現コースの生徒の皆さんが特別にデザインし、制作してくれたものです。

(平和連帯推進課)

長崎原爆犠牲者 慰霊の会

本財団では広島市と共催で、長崎に原爆が落とされた八月九日に、同じ被爆地である広島から長崎の原爆犠牲者に哀悼の意を表し、平和への誓いを新たにすため、「長崎原爆犠牲者慰霊の会」を開催しています。

昨年、広島平和記念資料館一階ロビーで開催した慰霊の会には、被爆者や市内外からの来館者など約八十人が参加しました。

まず、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典のテレビ中継を視聴し、原爆投下時刻の午前十一時二分に全員で一分間の黙とうを捧げました。続いて、広島県原爆被害者団体協議会の吉岡幸雄副理事長から「被爆者の核兵器廃絶の願いを世界に訴えていきたい」とご挨拶をいただきました。最後に、長崎の被爆者証言ビデオ(証言者：木村徳子さん)を視聴して閉会しました。

(平和連帯推進課)

平和への思いを育む 夏のキャンプ

本財団では、三滝少年自然の家と似島臨海少年自然の家との共催で、小学四年生から中学三年生までを対象に、「こども平和キャンプ」を開催しました。昨年八月二日から四日にかけて行われたキャンプには、小学生二十六名、中学生四名、ボランティア六名が参加しました。



資料館にてピースボランティアの説明を受ける参加者

始めに全員で原爆死没者慰霊碑への献花を行い、原爆犠牲者の冥福を祈りました。その後、三日間のプログラムの中で特に参加者に好評だったのが、似島臨海少年自然の家での海水プール、バウムクーヘン作りでした。友達と協力しながら丹念に焼き上げたバウムクーヘンのおいしさと、団結して作る喜びを味わうとともに、なぜ似島がバウムクーヘン発祥の地となったのか、その歴史について学びました。参加者にとって夏の思い出の一ページになるとともに、戦争と平和を考えると良い機会になりました。また、八月六日には、小学生十六名とボランティア三名が、平和への気持ちを胸に平和記念式典に参列しました。

（平和記念資料館 啓発課）

「ヒロシマの心」を母国に

留学の地として広島を選んだ留学生に「ヒロシマの心」を理解してもらうとともに、国境を越えて世界恒久平和を目指す行動する若者を育成するため、三部構成で留学生による平和フォーラムを実施しました。

七月二十八日(土)

【第一部】自主映画「運命の背中」

上映会 ―被爆した夫の背中をめぐる物語―

百七十二人の参加者（うち留学生二十八人）が約四十分間の映画を鑑賞しました。

一発の原子爆弾が一瞬のうちに、家屋だけでなく結婚間もない夫婦の生活も破壊していく様子を、参加者は真剣に見入っていました。夫のケ



出山監督による映画紹介

ロイドの背中を通して当時の被爆者の生活を映し出し、原爆の悲惨さと夫婦の絆を見事に描いた作品でした。

【第二部】出山知樹監督によるトークと意見交換会

第二部では、NHKにアナウンサーとして勤務するかたわらの自主映画を制作した出山監督の話を行いました。監督からは「若者が平和について考える一つのきっかけになればと思います。映画を製作した」とのメッセージが伝えられました。

意見交換会では、福島の原発

八月六日(月)

【第三部】平和記念式典参列

留学生とその家族十八人が式典に参列しました。

母国では紹介されることのない式典に、大勢の方々が参列する様子を見て平和への関心の高さを感じ、同じ過ちを繰り返さないという誓いを共有しました。参列後のレポートでは「何も無くなってしまった場所から素晴らしい復興を遂げたことに感動した。」「家族を失った人たちの気持ちが想像できて悲しみを感じた。」との感想が寄せられました。

（広島市留学生会館）

ヒロシマピース フォーラム

本財団では広島市と共催で、市民が「平和の原点」としての「ヒロシマ」を見つめ直し、原爆や平和について考え、どのように行動していけばよいかを探求する機会を提供するため、「ヒロシマ・ピースフォーラム」を開催しています。本年度も五月から七月までの隔週土曜日に計六回開催し、十代から七十代までの百十二名が参加しました。昨年度に続き、フォーラムの



第二回ピースフォーラムでの被爆樹めぐり

受講者が広島市立大学の「平和インターンシップ」に参加できるようにするなど同大学の講義である「広島からの平和学」と連携して開催しました。また、原爆や平和に関する多角的な講座を用意するとともに、グループ討議を行うなど参加者間で活発な意見交換ができる内容となりました。

参加者のアンケートでは、「様々な世代の人と意見交換をする機会を持つことができ、本当により経験となった」、「今後はより自発的に平和について考えていこうと思う」といった感想が寄せられました。

(平和連帯推進課)

国連軍縮フェローズの受け入れ

軍縮の専門家を育成する目的で国連が主催する「国連軍縮フェローシップ計画」の研修生(フェローズ)を、昨年九月二十八日(金)から三日間広島に受け入れました。

国連軍縮フェローシップ計画は、国連が昭和五十四年(一九七九年)から実施している研修事業であり、昭和五十八年(一九八三年)から毎年広島で受け入れを行い、これまでに約

七百七十人が来広しています。

今回は、二十五か国の若手外交官二十五人が参加し、二十八日(金)に広島に到着した後、歓迎レセプションに出席、被爆体験証言者など地元参加者と交流しました。

翌日、一行は原爆ドームや原爆の子の像の見学、原爆死没者慰霊碑への献花を行うとともに、広島平和記念資料館、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館を訪れました。また、本財団のステイブ・リーパー理事長から平和市長会議の取組について



原爆ドーム前に集う国連軍縮フェローズ一行

「国際平和デー」記念行事の開催

国連では、毎年九月二十一日を「国際平和デー」と定め、世界の停戦と非暴力の日として、この日一日敵対行為をやめるよう呼び掛けています。本財団でも、昨年の国際平和デーの正午に、原爆死没者慰霊碑

に一分間の黙とうを捧げ、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現を祈念するとともに、黙とうに合わせ、「二〇二〇年までの核兵器廃絶」という平和市長会議の横断幕を掲げるなどの記念行事を開催しました。また、平和市長会議の呼び掛けにより、他の加盟都市においても同様な記念行事が開催されました。

(平和連帯推進課)



慰霊碑前で黙とうを捧げる参加者

の説明を受け、映画『ヒロシマ・母たちの祈り』の視聴、松島圭次郎氏による被爆体験証言の聴講などにより被爆の実相についての理解を深めました。

参加者からは、「広島でのプログラムは非常に心に残る経験となった。核兵器による壊滅的な被害の状況を理解することができた」、「広島訪問は、仕事の上でも自分自身の人生においても、心に残るものとなった」、「核兵器のない世界の実現に向けて、これから全力を尽くす決意を新たにしたい」といった感想が寄せられました。

(平和連帯推進課)

英語で伝えよう ヒロシマセミナー

平和記念資料館では、原爆被害に関する基礎知識を英語で伝える方法について学ぶ「英語で伝えようヒロシマセミナー」を実施しています。

平成二十四年五月二十七日(日)と七月二十九日(日)に実施した「一般の部」には、海外渡航の予定や、ホームステイなどで外国人を受け入れる機会のある一般市民、合計約百三十名が参加しました。

各回の前半部分では、米国出身の英語教員クレイグ・ネヴィットさんが、原爆被害の概要について英語で説明した後、外国人からよく寄せられる質問に英語で簡潔に答える方法を説明しました。

五月の第一回セミナーの後半部分では、本財団のステイブン・リーパー理事長が、世界の核兵器の現状や、核兵器禁止条約の締結を目指す国



5月27日に開催された「一般の部」において、講師のクレイグ・ネヴィット氏が参加者からの質問に答える様子

際的な機運の高まりについて講演しました。

七月の第二回セミナーの後半部分では、ネヴィットさんやリーパー理事長が講師となり、被爆等の影響に関する英語での質問にどのように答えるかをグループで話し合い、発表しました。

また、留学予定の高校生を対象に五月二十六日(土)・六月十六日(土)・六月二十一日(木)・六月三十日(土)に実施した「高校生」には、合計約百四十名が参加しました。

セミナーの参加者からは「説明がわかりやすかった」「海外で『ヒロシマ』を伝えたい」「今後もっと知識を深めていきたい」

といった感想が寄せられました。(平和記念資料館 啓発課)

島根県松江市と山口市で原爆展を開催しました

本財団では、原爆被害の実相を伝え、核兵器廃絶への機運を高めるため、平成八年度から国内主要都市で原爆展を開催しています。

本年度は次の二都市で開催しました。

【松江市】

期間：七月六日(金)～十一日(水)(六日間)

場所：島根県民会館

【山口市】

期間：八月二日(木)～六日(月)(五日間)

場所：山口市民会館

会場では、被爆の実相や核兵器の現状を伝える写真パネルや被爆資料の展示のほか、市民が描いた原爆の絵の展示等を行いました。

また、被爆体験証言者の葉佐井博巳さんが松江市で、國重昌弘さんと森田節子さんが山口市

で証言を行いました。二都市の開催で、約二千七百名が来場しました。両会場ともに多くの小学生や親子連れが来場し、真剣なまなざしで展示物を見たり、証言を聞いたりする姿が見られました。

来場者からは、「広島に行きたくてもなかなか行けないので、こういった機会を作ってもらってとてもありがたい」「子どもたちの未来に二度と同じことを起こさないようにしていきたい」

などの感想が寄せられました。(平和記念資料館 啓発課)



会場の様子(松江市)

ドイツの博物館で青少年教育を担当する職員七名が資料館を訪問しました

平成二十四年十一月十三日(火)、ドイツ国内の博物館で青少年教育事業を担当する職員七名が平和記念資料館を訪問しました。一行は、平成二十四年度日独青少年指導者セミナー「博物館における青少年教育」の一環として来日したものです。

一行は、資料館の展示見学後、前田資料館長を交えて資料館職員との意見交換を行いました

た。ドイツの参加者からは、ユダヤ人強制収容所生存者の高齢化が進んでいることや、戦争関係の展示の見学を嫌がる子どもがいること等の問題が指摘され、当館の状況等について質問がありました。また、戦争を家族の歴史からとらえるアプローチを取ることにより、人間性に訴え、子どもが戦争を身近な問題として考えることができるという意見がありました。短い時間ではありましたが、ドイツの博物館の現状を直接聞くことのできる貴重な機会となりました。

(平和記念資料館 啓発課)



被爆の実相を語る被爆体験証言者

平成二十三年度から二人の証言者と五人の生徒が二グループに分かれて制作し、完成した五点の絵画が今年度、本財団に寄贈

された。昨年七月二日(月)に、基町高等学校展示ギャラリーで行われた完成披露会には、兒玉光雄さん、森田節子さんの二人の被爆体験証言者と、創造表現コースの生徒五人が出席しました。

和意識を広げていく義務があると思う。制作した絵が、後世へ原爆の悲惨さを伝える手助けになれば嬉しい。などの感想が寄せられました。

制作した生徒からは、「見たことのない情景を絵にするのはとても難しく、悩みながら描いた」「直接被爆者に話を聞ける機会が減少していく中で、広島で生まれ育った私たちには、平和を後世に継承します。」

(平和記念資料館 啓発課)

被爆体験講話会を開催 被爆の実相を 多くの方に

本財団は今年度も、平和記念公園を訪れる人々が事前に申し込むことなく被爆体験を聴くことができる被爆体験講話会を開催しました。

八月四日(土)から六日(月)、十三日(月)・十四日(火)、十月五日(金)・六日(土)の七日間、全十六回の講話会(うち四回は英語)と原爆に関するアニメーションの上映を行いました。

「原爆の絵」が完成 被爆体験を絵に描く

本財団は、広島市立基町高等学校普通科創造表現コースの協力を得て、平成十九年度から、本財団被爆体験証言者とボランティアの生徒が共同し、証言者の記憶に残る光景を描く「原爆の絵」の制作に取り組んでいます。

寄贈された「原爆の絵」は、被爆体験をより一層理解してもらうために、証言者が被爆体験講話などで活用することも、被爆当時の広島の様子を絵画で残すことにより、原爆被害の実相を後世に継承します。

題名：「被爆した女学生達」
制作者：西家奈津 (基町高等学校普通科創造表現コース3年) 森田節子 (被爆体験証言者)

争を体験した世代の人まで、広島県内外から延べ千三百四十三人の来場者があり、熱心に耳を傾けていました。アンケートでは「二度とこのようなことは起こってはならない」「平和と生命の大切さがわかった」「子どもたちに伝えていこうと思う」などの声が寄せられました。

題名：「忘れられない～あの日」
制作者：富田彩友美 (基町高等学校普通科創造表現コース3年) 兒玉光雄 (被爆体験証言者)

題名：「橋渡る時」
制作者：嶋田さくら (基町高等学校普通科創造表現コース2年) 森田節子 (被爆体験証言者)

題名：「東照宮にて」
制作者：前原詩乃 (基町高等学校普通科創造表現コース2年) 森田節子 (被爆体験証言者)

題名：「倒壊校舎からの脱出」
制作者：花岡美優 (基町高等学校普通科創造表現コース3年)、兒玉光雄 (被爆体験証言者)



資料展のタイトル・パネル

「絵本はだしのゲン」複製原画資料展を開催

子どもたちの多くは、まず「はだしのゲン」を読んで、原爆を知るといわれています。平和記念資料館では、「絵本 はだしのゲン」の複製原画を展示する資料展を、平成二十四年七月十九日から九月三日まで、当館東館地下一階で開催しました。

中沢啓治氏の「はだしのゲン」誕生のきっかけとなった作品「おれは見た」は、昭和四十七年（一九七二年）十月、『別冊月刊少年ジャンプ』（集英社）の漫画家自伝企画の第一弾として掲載されました。そして翌年六月から『週刊少年ジャンプ』

で「はだしのゲン」の連載が始まりました。

平成二十四年は「おれは見た」の発表から四十年の節目の年に当たることから、中沢氏から広島市に寄贈された「絵本はだしのゲン」の原画を紹介する資料展を行いました。

今回の資料展では、中沢氏のメッセージや複製原画を十四点のパネルにして展示するとともに、平成二十三年七月に完成した中沢氏の生涯を取り上げた記録映画「はだしのゲンが伝えたいこと」も会場で上映しました。夏休み期間中でもあり、観覧者が途絶えないほどの盛況ぶりでした。

中沢啓二氏は昨年十二月十九日に逝去されました。生前のご功績を偲び、心よりご冥福をお祈りいたします。

（平和記念資料館 啓発課）

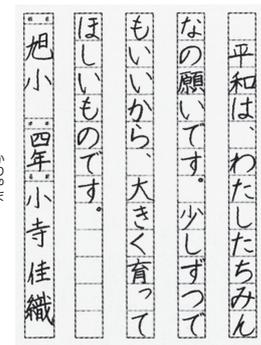
第三十回 ヒロシマ平和書道展

平和への熱い思いを書に

平成二十四年十月二十一日から二十三日まで、平和記念資料館において「第三十回ヒロシマ平和書道展」（主催―ヒロシマ平和書道展実行委員会「毎日新聞社、毎日書道会、本財団で構成」）を開催しました。



山口県下関市勝山小学校五年生水野沙耶さんの作品



広島県府中市旭小学校四年生小寺佳織さんの作品

広島平和文化センター理事長賞

広島県内を中心に北海道から鹿児島まで、五歳から九十五歳まで幅広い年齢の方から、平和の尊さや生命の尊厳を訴える力作五千四百二十八点が寄せられました。

た。また今回は、日本在住の米国、中国、韓国の方からの出品もありました。

全ての作品に特別賞、特選、秀作、佳作、入選のいずれかの賞が授与されましたが、このうち特別賞百十三点の表彰式を十月二十一日（日）に行いました。

また、この日から開催された展示会には特別賞と特選の作品、合計九百三十三点が展示され、三日間で千四百四十九人が訪れました。初日には、全国から訪れた受賞者やその家族らが作品の前で記念写真を撮りながら喜びを分かち合う姿が多く見られました。

資料調査研究会発表会
核をめぐる動向など
研究成果を発表

（平和記念資料館 啓発課）

計画家を中心に紹介しました。

○北川建次会員（広島大学名誉教授）
「広島を訪ねる修学旅行生の動向について」と題し、修学旅行のしおりから分かる訪問先等について報告しました。

○西本雅実会員（中国新聞編集委員）
「原爆報道の始まりをみる」と題し、被爆直後からの日米の新聞が何を報道したかを報告しました。

○水本和美副会長（広島市立大学広島平和研究所副所長）
「最新の核をめぐる動向と論調」と題し、オバマ大統領再選後の国際情勢や、日本国内での核兵器をめぐる最近の動向を解説しました。

○横山昭正会員（広島女学院大学名誉教授）
「市民が描いた原爆の絵」の大切さとして、市民が描いた原爆の絵を紹介しながら、そこに込められた思いを解説しました。

平成二十四年十二月二日（日）、広島平和記念資料館資料調査研究会の研究発表会が開催され、五人の研究者が発表しました。来場者は約六〇人でした。

○石丸紀興会員（広島諸事・地域再生研究所代表）
「丹下健三による広島平和記念公園の計画対象区域と計画内容」と題し、丹下健三がイギリスで発表した

広島平和記念資料館
資料調査研究会とは
平成十年（一九九八年）に設立。物理学、歴史学、国際関係などの有識者で構成し、研究成果は資料館の展示などに反映されています。

広島平和記念資料館 学芸課
☎（082）241・4004

【お問い合わせ】
広島平和記念資料館 学芸課
☎（082）241・4004

「市民が描いた原爆の絵」の大切さとして、市民が描いた原爆の絵を紹介しながら、そこに込められた思いを解説しました。

相互の協力を確認 日本平和博物館会議が開催されました

平成二十四年十一月八日、九日に、広島平和記念資料館で第十九回日本平和博物館会議が開催されました。この会議は、戦争の惨禍を人々に伝え、平和の実現に資することを目的とする博物館等が、協力して調査研究を行うなど相互の連携を図り、平和を推進するために毎年開催されています。

広島では三回目の開催

平成六年に第一回の会議が広島

平和記念資料館で開催されて以来、加盟館が順番に会議を開催しています。加盟館の運営・管理に共通する課題について情報交換や議論が行われ、その成果が各館の業務に反映されています。また、各館の交流を深め、企画展やシンポジウムなどの共同事業の実施や、海外の平和に関する博物館とも連携しています。現在、十の平和博物館が加盟しており、広島平和記念資料館では三回目の開催となりました。

日本平和博物館会議加盟館

館名	(所在地)
埼玉県平和資料館	(埼玉県東松山市)
川崎市平和館	(神奈川県川崎市)
立命館大学国際平和ミュージアム	(京都府京都市)
ピースおおさか	(大阪府大阪市)
大阪国際平和センター	(広島県広島市)
広島平和記念資料館	(長崎県長崎市)
長崎原爆資料館	(沖縄県糸満市)
沖縄県平和祈念資料館	(神奈川県横浜市)
あーすぷらざ	(神奈川県横浜市)
神奈川県立地球市民かながわプラザ	(沖縄県糸満市)
ひめゆり平和祈念資料館	(沖縄県那覇市)
対馬丸記念館	(沖縄県那覇市)

十年後の日本平和博物館会議

会議では、一日目、「十年後の日本平和博物館会議のあり方について」、「定例会にオブザーバー参加を認めることについて」、「加盟館の入館者状況の情報の共有化について」の三つの議題がとりあ



活発に意見交換が行われました

げられました。

「十年後の日本平和博物館会議のあり方について」は、立命館大学国際平和ミュージアムから「直面する平和の問題や社会の課題について今後日本平和博物館会議全体がどのような役割を担うか、具体的に共同巡回展や共同研究、研修などが考えられる」との提案を基に意見交換が行われました。各館からは、「共同巡回展、職員研修などを実施したいが、予算措置をどのように行うか」、「資料の輸送をどのように行うか」、「平和博物館ハンドブックの共同編集も考えられる」などの意見が出されました。結論として「お互いが各館の資料やデータを利しながら協力体制を築

いていく」となりました。また、「オブザーバー参加は、その年の幹事館が日本平和博物館会議の目的等に照らしつつ必要に応じて加盟館に意見を伺うなどとして判断を行う」、「入館者状況の集計は試行的に今年度幹事館の広島平和記念資料館が行う」とされました。会議に引き続き、全参加者が本財団被爆体験証言者の松本都美子さんの被爆体験証言を聴講しました。

パネル展示

「平和博物館を知ろう」

会議の開催に合わせ、加盟館のネットワークの充実と加盟館の展示や活動を多くの方々にも知ってもらうため、パネル展が開催されました。

■展示場所

平和記念資料館東館地下二階

■展示期間

平成二十四年十一月六日(火)〜平成二十五年一月十六日(水)

■展示内容

日本平和博物館会議加盟館位置図、加盟館ごとの所在地や交通アクセスなどを記したパネルと、館の展示内容や活動を紹介するパネルを展示。

また、パネル展示の内容に則して加盟館ごとにクイズが出題され、全問正解した応募者の中から抽選で各館のオリジナルグッズがプレゼントされました。

ガイドツアー

「平和博物館を知ろう」

二日目は、パネル展示「平和博物館を知ろう」のガイドツアーを各館の参加者が行った後、フィールドワークを行いました。



ガイドツアーで展示パネルの説明を行うひめゆり平和祈念資料館の島袋館長

十一月一日にオープンした「シユモールハウス」に始まり、広島城内にある中国軍管区司令部跡、旧日本銀行広島支店、袋町小学校平和資料館、広島アンデルセン(旧帝国銀行広島支店)の順に見学しました。(平和記念資料館 学芸課)

市民が描いた原爆の絵 炎の中に 閉じ込められて

■期間 平成25年6月まで
■会場 広島平和記念資料館東館
地下1階展示室(3)

昭和四十九年(一九七四年)にNHK広島放送局に被爆者から寄せられた一枚の絵がきっかけとなり、同放送局の呼びかけで市民から二千二百二十五点の絵が寄せられ、後に広島平和記念資料館に寄贈されました。平成十四年(二〇〇二年)には当館、NHK



作者 よしおかみつこ 吉岡 満子 さん

広島放送局及び中国新聞が「原爆の絵」を募集し、千三百三十八点が寄せられました。その後も「原爆の絵」は描かれ続け、今もなお寄せられています。当館では、それらの中から毎年テーマを定め、作品を展示しています。

今回は「熱線」や「大火災」をテーマに、「熱線を浴びる」、「迫り来る炎」、「焼き尽くす」、「火葬」、「焼け跡から」という五つのコーナーで、四十九点の作品を紹介しています。原爆投下後、迫る猛火から逃げ惑う人々で市内は混乱状態に陥り、

建物の下敷きになり生きながら焼かれる肉親を助けることができず、ただ見守るしかない人々が多くいました。

これらの絵からは、生と死のはざまに直面した人々の苦悩、日常を一変させ、人間らしさを奪った原爆の非人道性が伝わってきます。絵を通して、原爆被害の実相をご理解いただければと思います。

■お問い合わせ

広島平和記念資料館 学芸課
☎(082)241-4004

「収蔵資料の紹介」 「最期の言葉」

「収蔵資料の紹介」コーナーでは、平和記念資料館で収蔵している約二万一千点の資料の中から、半年ごとにテーマを定め、展示替えを行っています。

昭和二十年(一九四五年)八月六日、一発の原子爆弾により広島のみならず、一瞬にして廃墟と化し、多くの人々が、苦しみながら亡くなっていきました。人から伝え聞いた弟の最期の言葉、ひ

ん死のわが子がつぶやいた言葉。最期に発せられた言葉は、時を経ても、遺族の心から消えることはありません。

今回は、亡くなった方々の最期の言葉と遺族の思いを、遺品とともに紹介しています。

■展示場所

平和記念資料館東館三階
ミュージアムショップ前

■展示期間

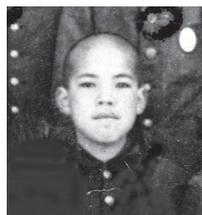
平成二十四年十月四日(木)～
平成二十五年四月十一日(木)

■展示資料

定期入れなど実物資料六点

■お問い合わせ

広島平和記念資料館 学芸課
☎(082)241-4004



木島和雄君(当時15歳)の遺品

定期入れ 寄贈/船附小子氏
「これを宮島の家族へ渡して下さい」

片足が崩れ落ちた駅の梁に挟まった弟は、生徒手帳と定期入れを自分の身代りに差し出して、意識があるまま焼かれてしまった

被爆資料、原爆死没者の 氏名・遺影、被爆体験記募集 被爆体験の 継承にご協力を

広島平和記念資料館と国立広島原爆死没者追悼平和祈念館は、被爆体験を継承するための貴重な資料の収集を行っています。皆様のご協力をお願いします。

●被爆資料 — 被爆された時に身につけられていた衣服など、被爆の事実を直接ものがたる実物資料。

●氏名・遺影 — 原爆死没者の氏名・遺影(氏名のみ)の登録も可能。

●被爆体験記 — 被爆者の体験記や、遺族・友人の追悼記など。

■お問い合わせ

被爆資料について

広島平和記念資料館 学芸課
☎(082)241-4004

●氏名・遺影、体験記について
国立広島原爆死没者追悼平和祈念館
☎(082)54336271

**追悼平和祈念館
開館十周年記念特別企画展
失われた爆心の街**
原爆死没者の遺影と
被爆体験記から
被爆体験記から
を開催しました



展示風景

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館は、平成十四年八月二日に開館し、十周年を迎えました。開館以来、原爆で亡くなった方々のお名前や遺影(約二万八千人)、被爆者、その遺族や友人が書いた被爆体験記(約十三万編)、証言映像(約千百本)などを収集し公開しています。



地層の断面標本

昨年八月一日から九月三十日まで開催した開館十周年を記念する企画展では、当館が位置する現在の平和記念公園周辺に焦点をあて、この地域で被爆した二百十一人のお名前

今回、展示した被爆体験記の中から、福島和男さんと野村英三さんの体験記(抜粋)をご紹介します。

福島和男さん(当時十三歳)の自宅や父が経営していた旅館は、中島本町の相生橋南詰(現在の平和記念公園北端)近くにあり、原爆により家族六人を失いました。少年時代に家族や友達と過ごした被爆前の中

島地区の様子をなつかしく書いています。

……天神町との境目に銭湯の桜湯があり、子供たちのコミュニケーションの場であった。ふるのない家が多く、ふるのある家の子供でさえ「オイふる屋へ行こうや」と誘いあって数人で行ったものだ。浴場から上がって座敷で相撲をとったり、パッチンをしたりして遊んでいると、時々「おじいさん」「バカたれ! 静かにせえや」と怒鳴られた。帰りがけに集散場の一銭屋(駄菓子屋)へ寄ってラムネを飲んだり、お菓子を食べたりして、遊びながら帰ったので冬は風邪もよく引いた。……

野村英三さん(当時四十七歳)は、中島本町の燃料会館(現在の平和記念公園レストハウス)の地下室で被爆しました。元安橋の惨状、元安川の水の竜巻、広島県産業奨励館(現在の原爆ドーム)の燃える様子など、被爆直後の爆心地付近の状況が詳細に書かれています。

……外は真黒い煙りで暗い。半月位の明るさだ。よく見ると広瀬の顔から手から血が流れている。急いで元安橋の所へ来た。ふと橋上を見ると中央手前の辺りに、まる裸の男が上向けに倒れて、両手両足を空に伸

ばして震えている。そして左腋下のところに何か円い物が燃えている。橋の向こう側は黒煙で覆われて炎がちらちら燃え立ちはじめに見える。橋を渡らずに現在の平和塔の方へ走って行った。ここは家屋疎開の跡で広場と一部菜園になっている。そして川に下りる右段の所に行って二人は腰を下ろした。……

体験記の続きは、体験記閲覧室や当館のホームページ(<http://www.hiro-tsuikinakan.go.jp/notice/info.php?id=14&font=ist>)で読むことができます。

体験記を通じて、被爆者の「こころ」と「ことば」にふれてください。

(原爆死没者追悼平和祈念館)

**県外在外被爆者
証言ビデオを
収録しました**

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、国内(県外)や海外で生活されている被爆者の証言を収録しています。

今年度は、国内では千葉県(六名)、埼玉県(五名)、東京都(六名)、神奈



収録の様子

川県(十三名)及び奈良県(二名)在住の被爆者を、海外では韓国(一名)及びアメリカ(二名)在住の被爆者を収録しました。

証言は、被爆時の状況のほか、県外や海外へ移られた時の状況、その後の生活についても語っています。

収録した映像は、編集後、本年四月から体験記閲覧室(地下一階)で公開する予定です。

今後も、国内・国外を問わず、貴重な被爆証言を少しでも多く収録し、後世に伝えていきたいと考えています。

祈念館では証言映像のほか、被爆体験記や関連図書を読むこともできます。ぜひ来館いただき、被爆者の「こころ」と「ことば」にふれてください。

(原爆死没者追悼平和祈念館)

平成二十四年度 ひろしま奨学金奨学生 決定書交付式・交流会

ひろしま奨学金制度は、昭和六十三年度に創設され、昨年度までに延べ七百十三人が奨学援助を受けています。

今年度も、市内の大学に通う私費留学生三十人を奨学生として選考しました。

七月十一日(水)に、奨学生、来賓(ひろしま留学生基金への寄附者)、留学生在籍大学の関係者及び選考委員会委員の計四十六人が参加し、決定書交付式と交流会を開催しました。

奨学生には激励の言葉が贈られ、奨学生の代表六人が決意を語りました。

奨学生は、広島という土地で学ぶ意義や(公財)広島平和文化センターから奨学金を支給される意義について考える良い機会となり、「ひろしま奨学金」の重みを実感できました。

また、寄附者と奨学生が直接交流することにより、奨学金制度の意義を深めることができました。

した。

(広島市留学生会館)

平成二十四年度 秋期日本語サポーター 養成講座&報告会 ～留学生の良きパートナー～

広島市留学生会館では、昨年五月に日本語サポーター養成講座を開催しました。その後もお問い合わせを多数いただいたた



熱心に講座を受ける参加者達

め、十月七日(日)に秋期養成講座を開催しました。今回も募集人数を上回る申し込みがあり、改めて市民の方々の留学生に対する関心の高さを感じました。養成講座では、講師の広島市立大学国際学部 岩田一成准教授から「世界の中の日本語の位置づけ」「言語の習得」「外国人について」という項目で説明を受け、その後、留學生が書いた作文の添削を体験しました。参加者は講師の話にうなずいたり驚いたりしながら熱心にメモをとっていました。

報告会では、現役サポーター十名が近況報告を行い、講師と交え、情報交換しました。活動を通してサポーター自身が日本について再発見し、留学生に教わる事が沢山あるとの報告で、有意義なサポーター活動の様子がよくわかりました。また、サポーター同志が交流する良い機会になりました。

留學生の良きパートナーとして、自然体で付き合い、自分自身も成長しながらサポートしていけるこの制度を、より充実したものにしていきます。

(広島市留学生会館)

平成二十四年度 広島市中工場見学 ～日常生活に関心を持つ～

広島市留学生会館では、留學生の生活支援の一環として、毎年、広島市環境局中工場を見学しています。今年度は十月二十日(土)に実施しました。諸行事等により少ない参加者でしたが、大変充実した見学になりました。

心しておられました。

参加者は、これまでごみや環境に関心がなかったが日常生活を考え直す良い機会になったと、貴重な経験に満足した様子でした。今後このような機会を設けてゆきます。

(広島市留学生会館)



充実した見学に満足の参加者

留学生会館まつり2012 「元気にー110111」

留学生をはじめ外国人と市民の皆さんとの交流を深めることなどを目的として、「留学生会館まつり2012」を、平成二十四年十一月四日(日)、広島市留学生会館において開催しました。

楽しい一日となりました。

十二回目となる今回は、「まつり」を通して留学生会館での国際交流・協力の活動内容をさらに進化させ、活力ある「元気」な会館をアピールすることを目指し、テーマを「元気にー110111」としました。

午前十時、二階ホールでオーピングセレモニーが行われ、迫田清三(さかたせいぞう)留学生会館長の挨拶の後、市民グループ、プッチーナによるファンファーレが奏でられ、留学生会館まつり2012が華やかに幕開けとなりました。例年どおり荒神地域の胡祭り(こま祭り)と同時開催とし、好天に恵まれたこともあり、昨年より多い約二千八百人の参加者にぎわい、

今回も昨年度に引き続き、留学生から、会館まつりの機会を利用して東日本大震災の被災地の皆さんに元気になっていただくようなイベントを実施したいとの声があがり、福島応援コーナーを設けました。ひろしま福島県人会のメンバーとともに、

まつり前日から仕込んだ、東北名物の「いも」の屋台を出店。サトイモを中心に野菜や肉をふんだんに使った味噌仕立ての煮込み料理三百食と、あわせて、福島県産米「こしひかり」を販売し、収益金二万円を、福島から広島への避難者の方々に対し、県人会とおして寄付しました。

恒例となった、「ANA 留学生日本語スピーチコンテスト」は、テーマを「私をささえる元気」とし、当日は、第一次選考会で選ばれた十名の留学生



スピーチコンテスト表彰式

では、十二か国・地域から十三団体が出店し、各国の自慢の料理に腕をふるいました。今回は、クリーンなイベントを目指して、何度も洗って使えるリユース食器を使用する「リユースプロジェクト」を採用し、ゴミの排出減量にも努めました。

イベント会場のホールでは、「留学生によるミニイベント」として、琴演奏や、日頃目にするのが少ないモンゴル、ネパール、インドネシアの踊りや、ピアノと声楽の演奏も行われました。

研修室会場では、「I love my homeland」留学生とのおしゃべりコーナー」と題して、十六か国の留学生が母国の紹介をしました。二〇一二年に来日したばかりのパプアニューギニア、ナイジェリアからの留学生は、英語と片言の日本語を交え、一生懸命母国の紹介をし、その姿がとても印象的でした。市民の皆さんからは、留学生とふれあう機会が持てて、楽しく貴重な体験だった、などの感想を数多くいただきました。

また、一階の交流ラウンジでは、市民の皆さんから、「南京玉すだれ」、「風船ショー」、「フラダンス」、「マジック」、「生け花体験」、「バルーンアート」、「エコ講座」など、興味深い大道芸の披露や、ワークショップなどをご紹介します。

当日は広島市立大学と広島女学院大学の十二名、そして、JICAキズナプロジェクトメンバー十一名の皆さんに、留学生と一緒にボランティアとしてご協力いただき、有意義な国際交流の一日となりました。



各国料理屋台

(広島市留学生会館)

「姉妹友好都市の日」 記念イベント 市民が海外文化 を堪能

広島市は、海外の姉妹・友好都市提携六都市に対し、二〇〇一年に都市ごとに「姉妹・友好都市の日」を設けて、記念イベントを開催しています。二〇一三年からは、この事業を本財団が市から受託して実施しています。各イベントの進行役はヒロシマ・メッセンジャーが務めました。

重慶の日

昨年十月二十一日(日)、広島市留学生会館にて記念イベントを開催しました。主催ー重慶の日実行委員会。まず、来場者は、四川料理の辛さを再現した「汗なし坦々麵」や、中華風かりんとう「麻花」、ウーロン茶に舌鼓を打ちました。

その後、ヒロシマ・メッセンジャーの沈琳さんと唐麗花さんが、重慶市の名称の由来や観光情報等ついて、映像を作って分かりやすく紹介しました。

記念コンサートでは、二〇一二年に来日し、日本全国で演奏活動を行っておられる戴茜さんによる古箏の演奏や、広島市在住の三浦琉璃さん他、しおん中国舞踊工作室の皆さんによる中国民族舞踊の披露、最後に、日本中国友好協会広島支部の皆さんの指導

のもと、来場者全員で太極拳の体験を行いました。



戴茜さんによる古箏の演奏

さらに二百四十人の来場者は、重慶市から頂いた記念品の抽選会などで楽しみながら重慶市や中国への理解を深めていきました。来場者アンケートでは、七十四％の方が、重慶市民のホームステイを考えたもよいと回答されました。

ホルルの日

昨年十一月三日(土・祝)、広島駅南口地下イベント広場において、「ホルルの日」記念イベント「ホルル・フラパーティー」を開催しました。主催ーホルルの日実行委員会。

まず、来場者をフレーザーコーヒータンやフルーツジュースでお迎えし、さらに、松井広島市長を初め、関係者スタッフ全員がアロハシャツを着て気分を盛り上げました。イベントの初めに古典的なフラ「カヒコ」によるオープニングの後、委員長、市長、ビデオによ



来場者がステージでフラを踊る

るホルル市長の挨拶を行いました。続いて、ヒロシマ・メッセンジャー永田京平さんと鉄村博美さん、そしてホルル出身のダリル・サトウさん、アメリカ出身のケリー・ジャクソンさんの四人が、大型映像装置を使い、ホルル市の食文化、歴史、観光地などを紹介しました。

メインは、三組のハワイアンバンドとフラのチームによる本格的なステージです。かわいい子供たちのフラや、優雅で華麗な女性のフラで、会場は南国ハワイのムードに染まり、華やかな雰囲気になりました。また、来場者参加イベントとして、ハワイアングッズの当たるクイズや、出演者と来場者がステージ上で一緒にフラを踊るレッスンも行われ、最後は「愛するハワイ」を参加者全員で合唱してイベントを終りました。

会場内では、ハワイアングッズの展示販売やリボンレイ製作体験もあり、

約五百人の市民が、アメリカやホルル市について理解を深めていきました。

ボルゴグラードの日

昨年十一月十一日(日)、広島市留学生会館で記念イベントを開催しました。主催ーボルゴグラードの日実行委員会。

今年には広島市・ボルゴグラード市姉妹都市提携四十周年に当たり、ボルゴグラード市の代表団をお迎えして行いました。

まず、来場者は、チャナヒヤプリヌイの試食とグルジアワイン、ロシアパーティーの試飲などめずらしいロシア料理や飲み物を楽しみました。

ホールでのセレモニーでは、委員長松井広島市長、ボルゴグラード市長の挨拶を行いました。その中で、両市友好のあかしとして、被爆樹木のイチョウの種が広島市長からボルゴグラード市長に贈呈されました。その後、ヒロシマ・メッセンジャーの山田英雄さん、中西利恵さんが、九月に広島市代表団の一員として訪問した時の様子や、ロシアの歴史、ボルゴグラード市について、映像を使って分かりやすく紹介しました。

続くロシア音楽コンサートでは、広島ジュニア マリンバ アンサンブルのマリンバ打楽器、田中香月さんのピアノ、広島合唱団の合唱により、さまざまなロシアの楽曲を披露しました。特に、広島合唱団のメンバーが、七月

にボルゴグラード市を訪問した際の現地での交流の様子を報告し、お世話になったお礼として来賓の方々へお土産を渡すなど、より一層交流を深めました。最後はロシア民謡の「トロイカ」などを参加者全員で歌って楽しみました。



マリンバ打楽器によるアンサンブル

このほか、会場内にはロシア・ボルゴグラード市の紹介展示コーナーもあり、ロシアの民芸品やボルゴグラード市の風景、交流の様子の写真などを展示しました。

また、一階ロビーでは、姉妹都市提携四十周年の関連行事として、イベント当日から二十二日(木)まで、ボルゴグラード市紹介展を開催し、九月に広島市代表団が訪問した時の写真やボルゴグラード市から贈られた記念品などを展示しました。

当日は、雨にもかかわらず二百八十人もの来場者が訪れ、姉妹都市交流の輪を深めました。

(国際交流・協力課)



世界の屋台料理を堪能

平成二十四年十一月十八日(日)、広島国際会議場、平和大通り緑地帯などを会場に、国際交流や国際協力の三十一の催しを開催しました。今年で十三回目となるこのイ

Step into the world together!
一緒に世界へ踏みだそう!

平成24年度「国際交流・協力の日」



トには、延べ約六千八百五十人の参加がありました。参加者は、国際交流・協力について、楽しみながら学んでいました。(主催 平成二十四年度「国際交流・協力の日」実行委員会 一本財団、広島市ほか計七十団体で構成)

☆「地球のステージ四」

〜果てなき回帰十震災未来編〜

今年も、国際医療救済活動を展開されている桑山紀彦さん(宮城県名取市で病院を開業している心療内科医)が案内役となり、語りとライブ演奏、そして大型映像を駆使し、日本や世界で起きている様々な出来事を紹介しました。

①「ジャワ島中部震災救援篇」

二〇〇六年五月にインドネシアで発生した大地震の被害により希望を失っていた現地の子どもたちが、桑山さんと音楽を通じた交流により心を開き、未来へ想いを馳せる様子を通して、震災被害の悲惨さと、それを乗り越え前を向いていく勇気の尊さを訴えました。

②「自転車日本一周篇」

桑山さんが自分探しの自転車日本一周の旅で出会った多くの人や、旅を終えた桑山さんの帰りを迎えた家族とのふれあいなどを紹介し、自分一人で生きているのではなく、周りの人と「共に」生きているという大事なことに気付いたエピソードを披露

しました。

③「震災未来編」

東日本大震災の被災地において、桑山さんの病院のある宮城県名取市の子どもたちと一緒に取り組んでいる「心のケア」の活動や、悲しみを乗り越え一歩を踏み出した閉上中学校遺族会の皆さんの取り組みなど、被災地の今を発信しました。

参加者は桑山さんの発するメッセージにそれぞれ深い感銘を受けて、涙する方も多くいました。

☆「なんとかしなまや！プロジェクト」トークセッション

JICA(独立行政法人国際協力機構)などが全国で国際協力活動の重要性をPRする「なんとかしなまや！プロジェクト」のトークセッションを開催しました。JICAの国際協力レポーターと、「教師海外研修」に参加し開発途上国を視察した広島や島根からの参加者、計四人の皆さんが、それぞれの視察内容を紹介し、今後どのような「国際協力」が必要なのかなどのテーマでセッションを行いました。

その後、広島市JICAデスクの濱長真紀さんが、今年で百回目を迎えた青年海外協力隊の「海外原爆展」について、現地の人々の反響や隊員の声などの報告を行いました。

☆「ご存知ですか？ 中国帰国者を…」

今年初めて参加した、中国残留邦人の帰国後を支えている中国・四国中国帰国者支援・交流センターにより、中国帰国者の現状について、パネルなどの展示で分かりやすく紹介しました。展示のほかに、「中国結び」という中国の結び方の体験や、太極拳などの衣装を着用し写真撮影をするコーナーなど、来場者参加型企画も用意され、大いに賑わっていました。来場者は、企画を通して中国帰国者との交流を楽しんでいました。

☆世界の料理と民芸品バザー

国際会議場南側の平和大通り緑地帯では、「ひろしま国際村 世界の屋台」と称し、二十団体が世界のような屋台料理を販売しました。また、「国際協力バザー」会場も、十四団体が参加し、国際色豊かな民芸品などを販売しました。それぞれ多くの来場者で賑わっていました。これらの売上は、参加団体の国際協力活動に役立てられます。

☆国際交流・協力活動の紹介

市民団体や大学、企業・団体など、計二十五団体がブースを設け、それぞれの国際交流・協力活動について、取り組み内容を紹介しました。参加者からは「広島にこれだけ多くの国際交流・協力活動団体があることを初めて知りました」との感想も聞かれました。

☆日本伝統文化の紹介と体験

毎年外国人に好評な、着物の着付けや茶道、いけばな、手描き友禅の体験コーナーを実施しました。外国人には日本文化に触れてもらい、日本人には日本文化の素晴らしさを再認識してもらおう契機となりました。

このほか、イベント会場をまわってクイズに答えるとプレゼントがもらえるクイズラリーや、親子で楽しめる催し、外国人のためのビザや法律相談コーナー、鍵盤ハーモニカや世界のコインを寄贈し開発途上国の子どもたちを支援するイベントなど、各会場は大いに盛り上がりました。

ボランティアで手伝ってもらった学生たちからも、「実に楽しかった。来年もやりたい」との言葉を多くいただきました。

(国際交流・協力課)



英語によるディベートに挑戦